

白銀の剣帝

# ミアリア

淫乳肛姦録

空蝉

表紙イラスト: 鈴音れな

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『白銀の剣帝ミリア 淫乳肛姦録』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



白銀の剣帝

# ミア

淫乳肛姦録

空蝉

表紙／鈴音れな

# 登場人物紹介

## Characters

---

### ミリア

王国の女王にして、戦闘の矢面にも立つ最強の剣士。戦場では厳しく、逆に日常国民にも貧富の隔てなく接する事から人気が高い。

### レオン

ミリアの息子。金髪と、王家の血筋の証であるエメラルドの瞳を持つ。母同様気立てが優しいが、若さゆえの気概も持ち合わせる。

### グラード

盗賊団を纏めるボス。実は狼獣人でかつてミリアに腕を斬られた経緯がある。筋肉質体型で、二メートル近い巨体。

夕闇の差し迫る草原を、一人の女が駆けていた。

「はっ、はっ、はぁッ……！」

白銀に輝く胸当て、箆手、具足を身につけ、その熟れた肢体をじかに包むのは、純白のレオタード。腰元には精巧な細工が輝く剣鞘が一本。強き意思のこもるエメラルドグリーン色の瞳を真つ直ぐに定め、プラチナプロンドのロングヘアを長身の背中で吹きすさぶ風になびかせ疾走する。

一見冒険者風にも見える美女は、この場はもちろん周囲の島々を治める辺境の小国——レイリアの女帝、ミリア。

夫を亡くした後も身一つで生まれ育った国を政治と戦両面で支える美麗なる守護者。島の寄せ集めゆえに内乱が絶えぬ国にあつて、白銀の鎧と剣を構え陣頭指揮を取り、良識を持って民衆よりの善政を敷く。美貌と柔和で気さくな性格から国民の信任厚く、「白銀の剣帝」と呼ばれし、国家の最高権力者であつた。

年の頃は三十代半ば。実年齢よりも若干若く、かつ熟した女の色気を纏った女帝が急ぎ、供も連れずに駆けるのには理由がある。

『貴国の王子、レオンは預かつた。返して欲しくば、勇猛馳せし白銀の剣帝自ら、一人で指定の場所まで来られたし』

鷹狩に出ていたはずの王子が戻らず、供の衛士が瀕死となつて書状を持ち帰つたのが、

今から二時間前。目下数十名からなる野盗に襲われたのだという。

（訓練された衛士を不意打ちとはいえ敗るとは……。しかも数十人という大所帯でありながら、気配を殺して近づき、レオンを攫さらった手口）

おそらく、相当手慣れた者どもの仕業だろう。推測するほどに嫌な不安がふくよかな胸を支配した。結局女帝は制止する臣下の参謀や並み居る大臣、軍人たちを押しつけるように城を飛び出し、今、こうして単身指定された国境の洞窟へと向かっている。

（レオン……。わたくしが行くまで頑張つて耐えていて……。！）

まだ■い一人息子のレオンは、入り婿であった亡き夫との間にできた後継者であり、一人で政治に、侵略から国を守るための戦にと奔走するミアにとって何よりも大事な唯一の家族だ。あらゆる意味で失うわけにはいかない存在だった。

——ざつ、ざざつ……。

（靴音。一、二、三……四、五人）

微妙な音のズレを聞き止め、四方で蠢く荒ぶる気配の数と照合して敵の数を確かめる。己の心が逸るのが、手に取るように分かった。

「どうやら、優雅にお出迎えはいただけないうですわね……！」

「ひひひつ、おらあ！」

ぶうんッ——びゅつ！

前触れなく右後方の茂みから突き出された片刃の蛮刀を、振り向くことさえせずに背中  
の長髪を揺らして避けきつてみせる。舞った金髪にかすらせすらしめない。生来の身体能力  
と研ぎ澄まされた察知能力。どれも、夫亡き乱世で国をまとめるために身につけた、必要  
不可欠の物だった。

「ちイツ、ち、乳イイ！ ひへ、へへえつ！ デカパイ揉ませろオオ！」

二人目の男が前方——目的地に向け駆け続けるミリアの視界の正面から、なぜか空いた  
左手をわきわきと蠢かせて襲いかかってくる。その指先が目指すのが、白銀のプレートに  
押し包まれ潰れた横乳だと知れると、カッと強い感情が当の胸先に立ち昇った。

「不埒なッ！ そこをおどきなさいっ。さもなくて……！」

「じゃきイツ！ ——ひゅッ……！」

己が右手を腰に伸ばした、次の瞬間。鎧同様の銀細工が施された鞆から抜き放たれた銀  
刃が横薙ぎ一閃——。敵とのちょうど中間で刃が空を切る。

「うおっ！ てて、てめえ。揉ませないつもりかデカパイ！」

あわてて後ずさった小柄な男が、口角を吊り上げ文句を吐き散らした。飛び散る唾がな  
びく後ろ髪のすぐ脇をかすめ、不快な感覚がわずかに肌を伝う。

「当たり前ですっ。わたくしは息子を……レオンを返していただくために、貴方がたの頭  
領とお会いするのです！ 不埒な目で見世物になるつもりはありませんッ！」

右手で抜き構えた細身剣——レイピアを振りかざし、敵を牽制しつつも足は止まらない。とにかく、歩を休めるつもりはなく、かといって敵を斬り殺すつもりもなかった。

「けっ、なんでえ。コイツ斬りかかってこねえぞっ。おい、一斉にやっちまええ！」

「くっ、邪魔をしないでっ。わたくしは人を傷つけたくはっ……」

——ひゅっ、ひゅんッ！

的確な剣さばきは本格敵な剣法を知らぬ野盗たちを翻弄する。だがそこに殺気がこもっていないと知れると、連中は恐れることなく突進を重ねてくるようになった。

駆けながらの牽制。しかも敵にすら傷を負わせたくないという想いが、剣の軌道を著しく限定させる。

（だめ……どうしても、斬れない。もう、人は斬りたくないの……！）

かつて、初めて出た戦場である獣人の腕を切り落とした。傭兵だったらしいあの時の男の、怒りと悔しさと苦しみに満ちた真っ赤な虹彩を、今でも時々夢に見る。深い傷となつて獣人兵に刻まれた一撃は、女帝自身の胸奥にも醜い傷を残し、深々と根づいて生涯拭えぬトラウマとなつてしまった。

「ち、乳イ！ 揉ませろっしゃぶらせろっ、ひ、ひひ！ 搾らせろオオッ！」

執拗に追いつがる瘦身の小男が、握ったナイフを振りかざし追いつがる。チリチリと髪の毛先で殺気を、さらに下卑た無数の視線をレオタードに包まれた肌全体で感じ取る。

連中は、生死にかかわらず白銀の鎧の奥の熟肢体を辱しめるつもりだ。確信にも似た想いがはちきれそうな胸一杯に充滿する。胸とは違い押さえ込む鎧がなく、駆けるたびにプルプルと跳ねる巨尻に、汗を吸った真つ白なレオタードがよけいに食い込んでゆく。

「はあつ、はつ……あれかつ……」

ようやく視線の先に、ぽつかりと黒く、人二人はやつと並んで通れる程度の口を開けた洞窟の入り口が見えてきた。あそこに駆け込みさえすれば、少なくとも狭い洞穴の中、四方から襲いかかられる心配はなくなる。愛しい息子、レオンにも会えるのだ。

「ちち乳乳乳イイッ！」

ざりッ——。意外な脚力で回り込んできた瘦身男が再び、白銀の胸当てという障壁を気にもかけずに手を伸ばしてくる。構えたナイフを舐めしゃぶる姿が妙に卑猥で、ゾクリと戦場で味わうのとはまた違う寒気が背筋を駆けた。

「おらああつつかまえたああああ！」

胸先数センチまでがむしゃらに突っ込んできた手のひらに向かい、

「はアアッ——！」

ミリアは避けるのではなく、あえて腿を振って身体を突っ込ませた。男の右腕を掻い潜り、右手のレイピアで他の男を牽制しつつ、左手で鞘を抜き一閃——。

——ずんんんッ!!

「おおおおおッ!!」

鞘は狙い通りに、瘦身男の股間へと突き刺さった。鞘を握る手に伝わる柔らかいようで硬い芯の詰まったような感触に羞恥を覚えながら。

「ごめんなさい……。先を急ぎますのでっ」

薄汚くすすけたズボンの前を押さえたまま倒れ込み悶絶する男の姿に憐憫を誘われるが、それ以上構っている暇もない。他の男たちが悶える仲間の姿を見て尻込みしている間に、一気に洞窟へと侵入してしまうべきだ。

(レオンっ、もうすぐ、もうすぐ助けに行くから……無事でいてちょうだい)

ようやく追っ手をすべて振りきった——そんな安堵がほんの一瞬だけ顔を覗かせ、緊張を緩めてしまったのかもしれない。逸る心が確認を怠らせ、瞬く間に頭上で爆発した強烈な怒気に気づけなかった。

「久しぶりだなア、ミリア王妃イ……」

「——ッッ!?!」

——ずごんんッッ!

真上から振り落とされたごつごつとした拳に、入り口を潜りかけた頭頂部を強かに打ち叩かれて、瞬く間に意識が遠のいてゆく。

「あ……あな、た……」

芝の上に倒れ込む寸前、霞む視界に映った大柄で毛むくじやらかな男の姿に、既視感を覚えながら。とつきにつぶやいたのは、亡夫の名。ジンジンと疼く脳天は痛みよりも眩暈と暗澹とした痺れとでもって泥沼の如き眠りへと、抗う女帝の意識を引きずり込んでいった。

どれだけの時間が経ったのだろうか。

ひんやりとした洞窟の、少し開けた数十人は集まれそうな空洞地で、女帝ミアは目を覚ました。

「うっ……こ、こは……?」

まだ霞がかかった脳を呼び覚ますように頭を振り、何度もまぶたを瞬かせてぼやけた視界をクリアにしていく。

鮮明になりつつある視界に最初に飛び込んできたのは、ぼっかりと口を開けた漆黒の暗闇。その視線の高さから、自分が今立った状態であることを知る。

だが、それにしてもは地面を脚裏で踏み締めている感覚がない。

(どう、なっているの。わたくしは、確か)

確か、突然頭上から殴りかかれ、それから——おぼろげで断片的な思考の整頓は、野太く野卑な声音によって遮られた。

「ふん。やっとお目覚めかア……ミア王妃。いや、今は女帝さんなんだっけなア」

赤々と膨れた尻肉を見て、男たちが笑う。レオンの傍に集まる男たちは、人質を監視すると同時に、目の前に突き出された巨尻を好き放題に視姦していった。

(ふぁ……あ、ああ、見られているうっ……)

熟女特有の丸みを帯びた肉付き、経産婦であるがゆえのわずかなたるみと、淫猥なカーブを描く腰つき。男を本能的に誘う肉体のイヤらしさを自覚しているだけに、無数の視線が集中する股間がなお熱を帯びて火照ってしまふ。

「い、いきまます。んっ……」

妙に間抜けな掛け声にまた野盗たちが声を上げて笑う。羞恥に頬を染め、悔しさを堪えるように唇を噛み。それでもミリアは四つんばいの姿勢を崩さず、高く突き上げたまま腰を後ろ向きに押し出した。

——くちゅうっ……。

「ツひ!? は、ひあつ、あ、熱い。それに、すごく……硬くなつてえっ……」

触れた途端に牡の先端がビクビクと震えて女帝のスリットを擦り上げる。股布越しに感じた剛直の熱と硬度に、女としての本能が感応した。

「いいぞ……もつとだ。何度も繰り返して、ヌレヌレマ○コとちんぽをキスさせろッ」

喜びの涙を滴らせる肉唇がパクパクと物欲しげに蠢く様が、薄布に透けてしまふ。密着しているので観衆にはばれないが、密着しているがゆえに獣人の肉棒にははつきりと気取

られてしまった。

「くう、うんツ……！　ま、まだ大きくなつて……ひあッ！　お尻ツンツンしないでえ！」  
焦れたのか、獣人自ら腰を突き出し、腫れた尻肉の谷間を硬く反った肉勃起で小突き上げてくる。ただ突くのではなく谷間を上から下へ、下から上へとなでるように。時折強く擦り立てながら、くびれた肉傘が縦断していく。

「くひひ。イヤらしいケツ振りだぜえ」

刺激から逃れるように左右に揺れる尻を見咎められ、観衆に口々に揶揄されて、思わずミアは抵抗をやめてしまった。元より強かった羞恥心がこの期に及んで重たい枷となり、身を縛る。もじつくことすら物笑いの種にされる屈辱。

動けなくなつたことでより強く擦れあうようになった肉傘と肉唇との間で、薄い股布を通して熱が通じ、染み出た互いの粘液が絡まりあう。

——にちツ、にゆる、にぢやああつ……。

「あぐ！　ふう、んんつ……こ、擦れるううつ……！」

つつかれる尻谷で、またムクムクと牡肉が膨張する。準じて増す蒸れた熱気は、肉傘から吐かれたものか、それとも濡れた自らの淫唇が吐きこぼしたのか。それすら、頭の中が快感で霞んでしまつて判然としなくなる。

「そおら！　ちやあんとママのエロい腰振りを見てやれ小僧！」

「うぐつ、いや、だッ。いやだああああ！」

くねくねとはしたなく牡肉にすがって揺れる巨尻の向こうで。正視できずにうつむきかけたレオンの髪をつかみ、脇の男が下卑た笑みを浮かべ、涙ぐむ少年の視線をちようどレオタードの股布が中央に収まるよう固定させた。

突き刺さる牡の視線の中でもはつきりと判別できる、ひと際強く、なのに哀しげな視線。血を分けた一人息子が泣きながらも誇りを保つべく、懸命の抵抗が続いている。なのに。淫欲に溺れてしまった母の肉体は、まるで股布を透かしてしまいそうな熱視線に否応なく喜悅を湧き上がらせてしまう。

「んんお……許されないッ、こんな、こんなことお……んひィッ!!」

ドクンと鼓動を響かせた獣人ペニスの衝撃に、触れあう尻肉が波打つように弾んだ。ミアの慟哭に昂奮を隠しきれずに、漏らした先走りを股布へとすり込んでくる。

「クク。息子の目に犯されて、もうヌルヌルになつてようだなあミリアア」

擦りつけられた亀頭の熱つぼさも、硬いくせに弾力に富んだ触れ心地も。塗り込められた粘性液の感触も最低だったが、何よりあえて女帝の心を傷つけようと放たれた言葉に散々揉み潰されて張り詰めた乳房一杯の恥辱が広がっていく。

——ずりつ、ずりりィ……。

「はおッ……んつ、ほあッ、あア……こ、腰が止まらなつ……くふううん」

「その鳴き声。ますます犬みてえだぜエ！ いいぜエッ！ 最高の気分だ！」

昂った獣人の体毛が一斉に逆立ち、ギラつく虹彩は紅一色に染まる。低くおぞましい哄笑が轟くたび、悔しさが充満しているはずの胸が締めつけられ、尻谷で脈打つ肉棒に呼吸するかのように腰がひとりでにくねり続けてしまう。

散々好き勝手に弄り倒された後、ぱったりと触れてすらもらえなくなった二つの膨らみの先端が、レオタードのぴっちりとした布地に擦れるだけでドキドキと高鳴っていた。尖りきった乳頭の内側でたつぷりと蓄えられた母乳がマグマのように煮え立ち、吹き溜まりと化した豊乳全体がカッカと火照ってもどかしさを演出する。

「へへっ。さっきからガキの視線がママのオッパイに釘づけだぜえ」

「どしたあ王子様。お乳が恋しくてたまらないんでちゆかあ？」

言葉で罵られる息子の、すすり泣く声が野卑な声の合間合間に聞こえてきた。

（レオンっ、ごめん、なさい……っ。わたくしが、もつとしっかりしていればっ……ううっ）

愛しい息子の哀しみが伝導し、胸が締めつけられる。同時に、息苦しさと一緒に迫り上がるもう一つの欲求が、絶えずミリアの胸を苦しめていた。

パンパンに張って重たくのしかかる二つの乳風船の先端から、白いミルクを好きにだけ吐き出してしまいたい——。哀しみを押し流すほどの猛烈な射乳欲求。卑しい想いが次々

に浮かんでは、はしたなく腰を揺すらせる。

「そら尻を押しつけてこい！ お前のマ○コと俺のちんぽを馴染ませるんだよ。でねえとぶち込んだ時に股が裂けて、奥の子宮までぶっ壊れちまうからなア！」

——ぐちッ、にゅぢゅぢゅ……！

薄い股布に浮いた小指大のポッチ——みつともなく腫れたクリトリスを硬い肉先で擦られるたび、堪えきれない愉悦が心の底から染み出してくる。

「んおッ、おう！ くひゃあッ、し、痺れちゃ、んぐういイイッ！」

亀頭の割れめで押しつけるように潰され、腫れた肉豆から鋭い快楽電流が恥骨にまで流れ込む。尿道を刺激された牡勃起も猛々しく反り返り、ますます昂奮を露わに先走り塗りに込んでくる。性器同士でキスをして、染み出た互いの淫液が薄布の障害など物ともせずにくちゅくちゅと絡まりあう。もう、にじみ出る嬌声を抑える気力すら奪われてしまった。

——ずりゅッ！

「んひア！」

ヒクヒクと蠢く肛門を擦られてさえ、甘い痺れに襲われる。ズリズリと擦れあうぐしよ濡れの布地と、その向こうの肉棒のねっとりとした質感。すでに指でほぐされてしまっていた尻穴がシワの寄ったあたりから盛り上がり、男の熱を求めて収縮する。

（ふあ、ああ……！ どんどんお尻が、あ、熱くなるう。ぐちゅ、ぐちゅうって擦れるたびに

……た、たまらなくううう！」

パクパクと物欲しげに蠢く陰唇を、はつきりとミリア自身感じていた。これ以上擦られると、本当に堕ちてしまう——そんな、確かで不吉な予感。もう昂ったまま下りてこなくなった性感が、間近で呼応する肉勃起につられてヒクヒクと肉唇を開閉させる。

「……ッ。そろそろ、頃合か」

（えっ……?）

不意に、すうつと冷たい風が股間をなで去っていった。熱くたぎっていた肉棒の熱気も感じられなくなる。不覚にも寂しさを覚え、艶かしく尻を振って悶えてしまった。

「か、母さまあつ……んひ、そ、そんなッ」

「へあ……きやあああ！」

引き攣った息子の声に驚き背後を振り向いて、ようやくぼやけていた頭が事態を理解した。獣人の右手がレオタードの股布をずらし、熟れた尻肉の全容が余すところなくレオンに、多くの野盗に、そしてグラーズの目の前に晒されている。

「ひッ……いやあつは、離してっ……んイイツ!？」

——ぐちゅうつ……。

恥と外聞を捨て尻を振って逃げようとしたところで、再び熱く濡れた肉傘が火照る双臀の谷間に覆い被さってきた。

触れた肉傘の粘つきと、一段と増した硬い芯の詰まったような硬度とに驚き、尻肉が跳ねる。腰にのしかかる男の重みに下半身の自由を制限され、どうにか這つても逃れようとした腕は疲労の蓄積でふるふる震え、現状を保つのがやつとの有様だった。

「んんっ……あはあ……み、見ない、でええ」

ますます密着する牡牝の生殖器。拒絶の言葉とは裏腹に、接着部にこもる熱気に浮かされ、なお熱い吐息が舌先を滑り落ちる。無数の視線が張りつきねつとりと絡むのを自覚しつつ、ことさら卑猥なくねりようで腰を上下にスライドさせてしまう。

——にゅぢゅっ、にゅるるうっ……。

「んはう、うんッ！ んっ、んは……か、硬いの、すごっ……おふううう！」

いつしか進んで腰を振り、異種族の牡の生殖器と己の股間とを擦り合わせていく。束の間、ミリアは「息子を助けるため」という免罪符に溺れた。長らく、国のため、息子が立派になるまではと我慢してきた。少しくらいはいいだろう。そんな、正常な意識を保っていれば思いつきもしない愚考が次々に腹の底——痺れ悶える子宮から湧き出てくる。

「ふん。ドスケベ女が」

嘲りと共にぐつと迫り出した獣人ペニスが濡れた秘芯を滑るように擦り、摩擦熱で悶えた肉唇が龟头を啜えようとすがりついた。ぬめりに従って滑った勃起はさすが肉襞から逃れるように谷間の上部へと照準をずらし——。

ぐちゅッ……。

「ひいあッ!? そ、そちがつ……」

一瞬で、肉悦楽に溺れていた意識が冷まされた。青ざめた顔を向けると、獣人はことさら下品な笑みで応じてくる。グリグリと、散々漏らしたたつぷりの蜜汁で濡れ光る龟头で押され、尻穴が物欲しげにヒクついてしまう。

(違うっ。悦んでいるのでなく、これは単なる生理的な反応っ……)

あわてて不自由な姿勢のまま尻を振り、逃れようとする。その無様な様を見つめる盗賊たちの嘲笑と、苦悶の声に艶を混ぜて絞り出されている、愛しい息子の嬌声。

「あふっ、か、かあさっ、ふぐうっ! んぎ……ッああ! お、おちんちんが疼くよお!」  
野卑な嘲りに抉られた心が凶らずも息子に「オトコ」を感じ取ってしまい、一気に被虐の悦楽に突き落とされる。

「んはうっ、くう、んうう……レオンっ、ごめ、なさ……アッ!」  
今日、もうすでに何度彼に謝っただろうか。

「くく、ピクピクケツ穴が震えてるぞミリアアア! ここにこんなぶつといちんぽをぶち込まれたことはあるのかア?」

「あ、ありっ、ありませんわあっ……そんな大きな、ウンチもしたことないっ……」  
朦朧とした意識下で、下品な言葉も歯止めなくすんなりとこぼれていった。

気品に満ちた女帝の顔も、凜として戦場を舞った女剣士の姿もとうに失い。蕩けた瞳を晒す熟女の姿に満足して、ぐぐつと膨れた肉勃起が萎む尻穴を押し上げ、こじ開ける。

「そおら……いくぞオツ！」

ぐッ——ぬぢゅぢゅぢゅうううッ！

強引に薄褐色の窄まりを押し広げた剛直の太さに、ぎちりと軋んだ肉穴が悲鳴を上げる。

「あぎイっ、んぐっ……い、やあっんおおおおおおくくく！」

痛みと恐怖とで意識が混濁する中、ぶつりと肉の裂ける音を確かに聞いた。

痛みに震え縮こまる腸壁が、深く突き刺さる極太肉勃起にゴリゴリと擦られ今度は痺れるような愉悅に惑わされる。

「ふんッ、これが。これが俺の腕を斬った女のケツ穴かよ！ いいぞいい締まりだ！」

牡の咆哮が結合部を伝って腸内と、薄壁で仕切られた子宮の方にまで響き渡る。揺すられた子宮が潤んで、入り口をぽっかりと開けてしまっている。腸粘膜は痛みを引き攣りながら、痛みを和らげるために嬉し涙の如く一斉に腸液を分泌し始めた。

「んおっ、おぐうっ！ ぐひあッ、あひ、待っ……んむうあアアア！」

——ばぢゅッぢゅぶぶぶうううッ！

滑りをよくした肉勃起はますます我が物顔で狭穴を縦断する。勢いをつけ打ち込まれた衝撃に、視界は白く染まり、壁越しに押された子宮がキュンキュンと鳴く。

(あひいッ……すご、ひいッ……。こ、こんなの今まで、感じたこと……ない！)

望まぬままに窄まった排泄用の肉穴で、ギチギチと牡肉を締め上げてしまう。震える四肢に纏った白銀の籠手と具足が、哀しげに薄闇で煌めいた。

「中がうねってるぜえ、それにドロドロだッ」

うつ伏せた熟女の背中にもたれるようにのしかかっってきたグラブズが、真つ赤に火照つた耳元でささやく。言われた通り、先に指でほぐされてしまった腸内はさらつく腸液をにじませてしつとりと潤み、子供の手首ほどもある獣人ペニスの侵攻を助けるように蠢いてしまっている。

「あはうつ、あ、熱いつ、お腹の中、それに、んぐおおッ！ お、お乳の先つぽおつ！」

凶悪な角度でくびれた肉傘が腸壁を擦るたび、ぬかるんだ粘膜は摩擦熱に怯えながら圧迫される悦びに打ち震えた。指では届かなかった奥深い位置までパンパンに詰め込まれた異物の存在が、奇妙な安堵感と底なしの充足をもたらず。

直腸を押しされ、挟られるそのたびにレオタードの中に閉じ込められた乳房が飛び跳ね、生地と擦れては息苦しさと溜まりゆくばかりの切なさを訴える。

(んはお、おおんっ！ 胸が熱いつ！ ぬ、脱ぎたい。レオタードの締めつけ、もおたまらないのおっ……！)

無理矢理に散らされた肛門の痛みはすでにほとんど感じられぬほどに薄らぎ。ただただ

胸の内を「蒸れた熱気から逃れたい」という想いが占拠していく。

「乳が熱いか。だが脱がせねえ。俺の腕を斬ったあの日と同じお前をッ、白銀の剣帝を俺は犯すんだからなァッ！」

——ぢゅぶんッ！　ぐぼッ、づぢゅぶううう！

「あぐうつんおつ！　おふうつ、ふううつ……お、奥ウウ！」

前触れなく始まった抽送に、地につけた手のひらが思わず汗で滑りかける。急いで腕に力を込めて突っ張れば、激しい突き込みに自然と尻を押しつけるはめとなる。どちらにしろ、ミリアにとって悪循環——負の連鎖は、もう止まらない。

哀しく輝く白銀の装備が抽送のたびに土と擦れ、すすけてしまいながらガチャガチャと鳴った。身体だけでなく、剣士としての誇り、そして国を愛する己の象徴が汚されていく。「いいのかケツがッ！　そら、そらァ！」

「んぐふうつ、あおつ、ひあああ！　ち、があつ、ツふひイイイ！」

被虐に打ち震える中。鋭く肛穴を突き上げられれば激しい快楽の疼きと一緒に、勝手に蕩けた声が舌先を滑って漏れ出した。浅ましい牝をゲラゲラと嘲笑う盗賊たちの視線。勃起乳首がコリコリと薄生地に擦れて浅ましく母乳を噴く。商売女顔負けにくねる股間へと突き刺さる欲情した視線が、たまらぬ快楽刺激となって恥骨を駆ける。

「そら、王子様もママのケツ振りダンスをしつかり見てやれや」

「あぐっ！ い、いやだああ！ ひあ、んひいやああああ！」

蟲にたかられた包茎ペニスを健気に腫らせ、王子はプライドを捨てて泣き叫ぶ。また、野盜たちの遠慮のない侮蔑と嘲笑が場を覆い尽くしてしまふ。

（レオンツ、いや、こんな、こんな姿を見られてえつ、はあうつ……なのに、どうしてつ）  
 どうして——腰の動きを止められないのだろう。獣人が腰のバネを使って遠慮なしに初物の肉穴をほじくり返していく。乱雑に突かれ、切れてしまった入り口が痛むはずなのに。何度も、何度も排便の後に紙で擦り性感を開発してしまった、排泄用の穴。卑しく熟れた肉穴はただズウンズウンと奥深く響く重たい痺れ、快感の源であるその感覚だけを貪欲に吸収する。

「はぐっ、か、痒いいいい！」

引き伸ばされたシワの部分に汗と先走りと腸液がすり込まれ、痛みを凌駕する痒みが渦巻いた。痒いから搔く——男の肉棒を使って。最初はそつと擦ったつもりが、徐々に亀頭で搔かれる快感に逆らえなくなり、腰の動きは大胆になった。

「はっ、ははは！ とんだ牝犬だぜッ！」

——ぎゅッぎゅぎゅうううつ！ ぷしィッ！ びゆるぶびび！

「んィッあおおおううう！」

のしかかる獣人の毛深い腕が地面すれすれで弾む両乳房をつかみ、薄生地越しに揉み潰

す。一気に押し寄せる射乳欲求の高波に流され、低く唸るような声を絞り、舌を突き出して悶え狂わされる。何度も体感した解放感が脳裏で反芻され、しきりに誘惑を繰り返す。我慢できるはずもなくあっさりと吐いた母乳は激しい勢いそのままにレオタードを染み出し、土に黒い斑点を刻む。甘く香り立つミルクの臭気に当てられ、野盗たちは皆股間を膨らませ、一様に前屈みの姿勢をとっていた。

「ぐうっ、うふうううっ……！」

息子の見ている手前、どうに堪えようと尻に力を入れて踏ん張りを利かせる。

——ぎゅうっ！

「ぐ……おっ、いい、締まりだっ！」

「くひいんおお！ ま、また太く、硬くなっ、ひああ！」

まったくの逆効果だった。きつく締めつけたことでよけいに肉棒との密着を強めてしまう。昂奮した勃起がなお硬直してグイグイと腸壁を押し、薄い壁越しに刺激を浴びた子宮が切なさや疼いて蜜を漏らす。

（ま、またお尻の入り口が痒くっ……んッ、くふううう〜）

わずか数秒腰の動きを緩めただけで再燃する痒みに、たまらず尻を振って結合部を擦った。途端に蒸れた胸一杯に満ちる痒みからの解放感と、心地良い充足。

——ぶびよっ、びゅびゅ……。

搾られるがままに母乳が嘔き漏れていくのも、解放感に拍車をかける。目一杯欲望を吐き出し軽くなった乳鞠は、けれどじきに蒸れた熱氣と股間からの痺れに侵され、また情欲を一杯に溜め込んでいく。

「くふうんんっ……。んおおっ、おおんっ！ ふあ！ お、おかしくなっちゃうううう！」  
グチグチと、尻穴と肉棒との間で粘着質な水音が弾ける。卑猥にひねった腰つきに侮蔑の言葉が飛んでも、もう腰を止めようとする気力さえ湧いて出てこなくなった。

「うわはははッ！ 犬みてえに鳴いて、すっかりケツもほぐれたじゃ……。ねえかッ！」  
——ずぶぢゅうううううッ！

激しく結腸を叩かれ、瞬時に視界が白一色に染まる。

「ふひいっ！ いいっ！ お乳嘔きながらああっ、お、お尻突かれへえええっ！」  
勝手に蠢いた舌が、引き攣りながら卑猥な言葉を口走る。涙をこぼししゃくり上げる息子の悲痛な声が、よけいに情念を煽った。貞淑を美德として永年欲望を抑えてきた、その反動が今一斉に熟れ媚体を焦がしていく。

（ああ、もう……。だめ。今、だけだから……）

諦めた瞬間、不思議な安心と共に痺れっぱなしの子宮が収縮し、潤んだ蜜がまるで小便のような勢いで吹き漏れた。牡肉を、その反り返った砲身から得られる肉悦を手放すまいとギチギチに締め上げて、尻穴がひっきりなく痙攣する。

「ぐぬッ……!!」

ブグリと膨らんだ肉傘の感触を、すがりつく腸粘膜が感じ取った。獣人の荒い息使いに、耳朶を、うなじをくすぐられ、否応なしに膣と腸の痙攣は間隔を狭め小刻みとなっていく。  
地面についた籠手と具足が擦れて鳴る哀しい音色も、土ですすけた白銀の輝きも。些細なことは膨大な快感に押し流され、すぐに脳裏から掻き消える。

「ひやらあつ、おつ、おぐうつ！ イッ、いつひやふうううつ！」

イク。亡夫の前でも漏らしたことの無い猥褻な宣言が自然と口をこぼれ繰り返された。  
腸の曲がり角までを埋め尽くされた悦びに、ますます引き締まるつるりとした肉壁で勃起のくびれをきつく絞る。暴れる肉傘にあふれた腸液がニチャニチャと攪拌され、いつそう粘膜と勃起の密着は強まり、互いの淫熱に溶けあつた狂おしいまでの情欲が、二乗三乗されあふれ返る。

（くるっ……熱いのがく、くるのおおお！）

脈打つ肉棒の鼓動が早まり、またいつそう大きく傘部分が膨らんだ。その時が来た。身構えた四肢を、度し難い衝動が巡る。——尻の奥で、熱い飛沫を浴び、絶頂したい！

「んひいひいッあああああ！」

——ぶびゅっびゅるるる！

ギチギチと搾られた乳先から、レオタードを染み出、噴き出るミルクと一緒に人として

の尊厳までがこぼれていった。肛門が痛みも痒みも忘れて、牡肉を味わうことに没頭する。きゆうきゆうに締まった筒状の肉穴全体で、快楽を与えてくれる肉棒へと吸いつき、濡れた粘膜でもてなす。まるで、愛しい男のモノへと奉仕するかのよう。

「ぐくつ……注いでやるッ出すぞオオッ！」

牡の咆哮につられてビクビクと痙攣した直腸が、捻転ねんてんを起こしたように引き攣れながら快楽を爆發させる。直後に浴びた熱いマグマの塊に、卑しく作り変わった尻穴がとどめを刺されてしまう――。

——どびゅぐうううつ！ どくつ！ どくうつ！ びゅッびゅぐ！ ぶぶッぶびびゆるうううううツツ！

「はひやあッ！ あおお……おぐつ！ おつ、おオッ！ イッグうううううう——！」

白熱に灼かれた尻肉が、じかにぶっかけられた奥から順に爛れ、ビクリビクリと小刻みに跳ねた。飛び散る飛沫にまで詰め込まれた濃厚な熱気と粘り気に侵され、白く霞んだ脳裏に多幸感が満ちていく。灼ききられた思考回路は、ただただ肉の悦びばかりを追い求め。

——びゅぷつ！ ぶびゅびゅ！ びゅつびゅびゅうううううううう！

濡れて張りつくレオタードはもはや防具としても衣服としての役目も果たさずに。震え、跳ね回る勃起乳頭が、地面に乳白色の水溜まりができるほど大量の母乳を吐き散らかした。乳を「出す」解放感と、精液を尻の中に「出される」底抜けの充足感。二つを同時に味わ

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**